

東日本大震災津波伝承館運営協議会の開催結果（概要）

1 開催概要

- (1) 日 時 令和2年6月15日(月) 13:30~15:00
- (2) 場 所 国営追悼・祈念施設管理棟（道の駅高田松原）セミナールーム
- (3) 出席者 委員9名（2名欠席）（下記参考のとおり）
- (4) 審議事項
ア 令和元年度東日本大震災津波伝承館の取組実績について
イ 令和2年度東日本大震災津波伝承館の事業計画について

2 審議概要

令和元年度の伝承館の取組実績を報告のうえ、令和2年度の事業計画について、次の点を説明し意見をいただいた。

- ・ コロナ禍の中、来館者が安心安全に見学できるよう感染予防対策を徹底
- ・ 復興教育の推進に向けた生徒・児童の受入態勢の整備
- ・ 震災10年の節目に向けた情報発信
- ・ 岩手大学及び東北大学との学術面の連携推進
- ・ これまで交流のあるインドネシアアチェ津波博物館及びハワイ太平洋津波博物館とのミュージアム連携を推進

3 協議会での主な発言要旨

各委員の発言要旨については、次のとおり。

- 南 正昭会長（岩手大学理工学部教授）
 - ・ 業種を越えてお互い伝承館に集い、学び合える施設になってくれればいい。
 - ・ 今後整備される伝承施設は目的がそれぞれ違うので、お互い見て回ってもらえるよう、震災伝承ネットワーク協議会と連携して情報発信していければいい。
- 柴山 明寛副会長（東北大学災害科学国際研究所准教授）
 - ・ メディアに取り上げられた回数を集計しておくといい。（社会の関心のバロメーターになる。）
 - ・ 東日本大震災津波以降様々な災害が発生しており、東日本大震災津波と他の災害で何が違うのかを解説員が学ぶことによって、解説に厚みが増してくる。
- 軍司 悟委員（県教育委員会事務局首席指導主事兼学校調整課産業・復興教育課長）
 - ・ 小中高校の「いわての復興教育副読本」を一新し、伝承館について紹介している。
 - ・ 教員を対象とした研修会を通じて、伝承館の見学について働きかけていきたい。
- 金野 靖彦委員（陸前高田市観光物産協会会長）
 - ・ 防災や災害教育の根底は「いのちは大切だ」ということに尽きる。伝承館が「いのちとは何か」について話し合える場所になればいい。
 - ・ 「いのち」について情報発信することで、この伝承館の施設は生きていく。そして次には「人と人との寄り添い」が続いていく。「いのち」について発信することは、岩手や陸前高田らしさが出てくると思う。
- 伊藤 雅人委員（一社・マルゴト陸前高田代表理事）
 - ・ 今の子供たちは自分に興味のある動画しか見ない。伝承館の動画を発信して、それを見た人は「じゃあ実際に伝承館に行ってみようか」ということにもなる。動画発信

は広報宣伝にもなり、再生数が上がればマーケティングにも活用できる。

○ 越野 修三委員（岩手大学地域防災研究センター客員教授）

- ・ 沿岸の自治体においても、震災後に採用された職員がいて、震災当時のことを知らない職員が多くいる。行政職員も伝承館に来て学んでもらいたい。
- ・ 全国の伝承館をみると、市民から忘れ去られている伝承館もあれば、中越メモリアル回廊のように活発な伝承館もあり、市民を巻き込んだ利用を考えていくことが重要である。

○ 千田 貴浩委員（岩手県立博物館副館長）

- ・ 子ども達が興味を持って自ら学ぶ仕掛けがあってもいい。例えば、来館の証として「御朱印帳」のようなものを用意するとか、遊び心を持つことができれば、リピーターを増やすことにも繋がっていく。

○ 上田 幹也委員（公財・さんりく基金三陸DMOセンター長）

- ・ 昨年度海外の旅行関係のエージェントやマスコミ系のジャーナリストの方々を三陸エリアにお連れした際、三陸の中で何を一番見せたいかと聞いたところ、共通していたのは「この伝承館だけは絶対に外せない」という話をいただいた。

○ 松村 敦子委員（元 赤崎中学校校長）

- ・ 学校現場では、伝承館に行くための交通手段は切実な問題だ。バスなどの手配ができればいい。